

令和3年度第1回山形県農林水産技術会議 議事録

開催日時：令和3年6月3日（木）13：30～15：20

開催場所：山形県庁1001会議室、オンライン

出席委員

小野 広美 委員	梶本 卓也 委員	菊地 郁 委員	木村 直子 委員
佐藤景一郎 委員	曾我 朋義 委員	西澤 隆 委員	長谷川直秀 委員
本田香奈子 委員	本多 親子 委員	宮武 恭一 委員	門間美千子 委員
養松 郁子 委員	和田弥寿子 委員		

欠席委員

大瀧 敦 委員	今田 裕幸 委員	武居万理子 委員	田村 勇次 委員
土屋 喜彦 委員	早坂 和紀 委員		

審議事項

1 山形県農林水産研究開発方針の改訂について

〈答申案の提出にあたり、研究に対する期待や助言について発言いただいたもの〉

委員：研究機関で考えるべきことではないかもしれないが、農業を続けるためには、意欲のある第三者にスムーズに経営を継承できる仕組みがないか。

また、天候により斑点米カメムシが多発する場合は防除回数が増えてしまうが、環境負荷にもなるし、農家の負担も大きい。消費者の意識が「斑点米が少々入っていても構わない」と変われば、環境負荷も少なくなるのではないか。そういった意識を醸成するような、消費者教育のようなものも大切なのではないか。

委員：提出した意見については、ICT活用のところにしっかりと盛り込まれており答申案全体としてはいいものになっている。

東北全域で人工林が伐期になってきているが、広葉樹林が多い山形県の地域特性を踏まえて、広葉樹の資源と管理について焦点を絞って重点的に研究所で取り組む必要性が認識されていればよい。

委員：農林水産研究開発方針などの将来構想のようなものは、どうしてもすべてをカバーするような書き方になってしまうが、そうすると論点がぼやけ、具体性に欠けてしまう。

スマート技術や品種育成について、もう少し具体的に書いてあってもよいと思う。

委員：大きな方針なので詳細は書く必要はないと思うが、畜産分野では人工肉や代替肉の技術開発が進んでおり、コストも下がっていくと考えられる。山形牛のブランドが代替肉などに奪われないようにしなければいけない。畜産全体に関わってくることだと思うので、具体的には書きづらいかもしれないが少しでもあればいいと思う。

AIやIoT化については、山形の小規模な経営形態や生産者の年齢などを踏まえた形というのがあると思う。

委員：エリートツリーは主に九州地方で研究された樹種であり、日本海側の積雪の多い、寒い地域では、エリートツリーの研究はまだまだ余地があるのではないかと。森林研究研修センターでも平成25年から研究がなされているが、もう少し研究を拡充していただきたい。「ドローンによる除草剤の散布」は、現場では喫緊の課題としてとらえており、人材不足の中では、明日にでも使っていきたいような手法。力を入れて取り組んでほしい。

委員：各委員の多様な意見に対して、丁寧に対応されているのはすばらしいが、有用な意見と、そうではない意見もあるので、研究開発をする上ではプライオリティをつけて実施し、研究開発で重要な成果を出していただきたい。

委員：本日のテーマとずれるかもしれないが、最近では環境問題に取り組んでいない企業、団体はありえないような空気になってきている。先日、県の農産物の重要な販売先が、GAPを導入した生産者からの調達を100%とする目標を発表した。GAPについては環境問題の面からまた盛り上がってきているので、山形のGAPの取組ももう一度整理をして加速しないと、販売上問題が出てくるのではないかと考えている。

委員：後継者不足について先ほども意見あったが、やはり収入が安定してさらに良くなっていかないと、後継者を含め農林水産業に打ち込めないというのが現状だと思う。

電気柵やビニール被覆など、SDGsや環境に対する配慮を欠いたような対策をしていかないと作物が取れない現実がある。やはり県などが主体となって対策や販売戦略が立てられるとよいと思う。また、環境負荷の少ない対策はないか。

委員：果樹での新樹形の栽培技術の確立について記載があり、これはもちろん重要だが、これに関わる要素として、日本の品種に適した台木の開発が必要になってくるのではないかと。公的機関でないと台木の品種開発のような時間がかかるものはできないので、ここに具体的に書き込む必要はないが、今後検討していただきたい。

委員：環境問題は非常に大きなテーマになっている。国でも2兆円規模の大きなプロジェクトが動き出す。これから研究開発を進めていくうえでは、そういったことを踏まえて、今のうちから少しずつ準備を進めておいたほうがいいのではないかと。

また、スマート農業ではハード面の開発はかなり進んで普及段階に入り、情報をどう生かして技術を使いこなしていくかという段階にきている。研究機関や普及組織においても情報リテラシーを上げていかないと、スマート農業の開発普及が円滑に進まない可能性があるため、そういった部分の人材育成の取組をしっかりとっていただきたい。

委員：食品加工分野では、販路について、デパートや道の駅での販売、輸出などといった規模を明確にして進めるとよいと思う。そばの品種については、品種開発と製麺品質向上技術など加工技術の連携をやっていくのは山形県の強みだと思うので期待している。品種のクオリティを上げていくと、一方では規格外品も増えるが、そういうものを有効に生かせる技術開発についても期待している。

委員：「改訂の背景」で、人口減少への対応や省コストが重要になってくるという産業の背景があるが、研究をする上では課題はなかなか減らず、環境の変化につれて増えてくることの方が多い。そんな中で、研究では非常に効率よく頑張っているということがわかった。開発方針の方向性が5つあり、それぞれに対応するということが検討していただき素晴らしいと思うが、どこを重点化していくかについても今後少し考えていく必要がある。

委員：以前の会議で議論された、大吟醸用の山形のオリジナル品種を開発するという分野で育成された「雪女神」を使った日本酒が鑑評会で高い評価を受け、一定の成果が出てきていると感じている。

答申案にも記載あるが、酒米その他の農作物の二次利用などについても、今後の研究課題の1つとして加えていただければありがたい。

委員：研究については、戦略を持って、どこに重点を置いていくかということに主眼を置いてやっていく必要がある。

以上